

## 夢の国の陰で—『オズの魔法使い』の悩める男たち

私はよい人間ですが、よい魔法使いではありません。  
私は、こんなベテン師の生活に疲れた。この城から出ていけば、  
私が魔法使いでないことは、たちまち人々に知れ渡ってしまう。  
だから一日中、部屋に閉じ籠っていないてはならないのです。  
—『オズの魔法使い』より—

吉田純子

### 1 神話化するおとぎ話

#### ◆ アメリカの基準点

L・フランク・ボーム (L. Frank Baum, 1856-1919) が『オズの魔法使い』(*The Wonderful Wizard of Oz*, 1900)<sup>1)</sup> というおとぎ話を発表して、一世紀になろうとしている。物語のプロットは、竜巻で家ごと吹き飛ばされた少女ドロシー (Dorothy) が架空の国オズに着陸し、かかし (Scarecrow)、ブリキの木こり (Tin Woodman)、おくびょうなライオン (Cowardly Lion) とともに数々の冒険を経て、エメラルドの街で支配者オズの魔法使い (Wizard of Oz) の正体を暴いた後、銀の靴の魔力により無事にカンザスの家に帰るというものである。この単純な物語は、批評家や「専門家」による度々の蔑視、発禁の脅威をくぐり抜けて、今日まで生き延びてきた。

しかも、『オズの魔法使い』(以下『オズ』と記す) は、アメリカ社会の節目に『オズ』の翻案作品を生み出してきた。1936年にMGM映画により制作された『オズ』、1950年代のアメリカン・ファミリーの全盛期にテレビ番組となった『オズ』、1974年から1975年にかけての黒人版ブロードウェー・ミュージカルの『ウィズ』(*Wiz*) と、1978年の映画『ウィズ』、さらに、文学の分野では、フィリップ・ファーマー (Philip Farmer) の『オズの曲技飛行士』(*Barnstormers in Oz*, 1982)、ジェフ・ライマン (Jeff Ryman) の『夢の終わりに・・・』(*Was*, 1993)、グレゴリー・マグワイア (Gregory Maguire) の『オズの魔女記』(*Wicked*, 1995) などの翻案作品が上げられる。

ジャック・ザイプス (Jack Zipes) は、おとぎ話『オズ』が翻案作品を生み出すことで、アメリカの「希望をはかる物差し」「基準点」となり、アメリカの神話となったと主張する。「オズは、アメリカがなり得なかったもの全てであり、……国民性とアイデンティティの確認のため、[アメリカ人が] 繰り返し立ちもどらざるを得ないものとなった」<sup>2)</sup> というのである。

### ◆ 多様な『オズ』の解釈

1960年代以降、『オズ』の翻案作品の人気と相まって、『オズ』をめぐる文学的、文化論的議論が活発に交されてきた。現在、『オズ』の解釈は、少なくとも以下のようなタイプに分けられる。(1)書かれた当時の政治的な比喩と解釈する。(2)現実逃避的なユートピアの空想物語と解釈する。(3)フェミニズム的に解釈する。(4)心理学的、心理治療的なモチーフを読みとる。(5)心理学、神話学、記号論などを用いて、文化論的に解釈する。この五つは、1993年の時点でニール・アール (Neil Earl) が類別した四タイプに、<sup>3)</sup>その後、次々と発表された文化論的解釈を加えたものである。

多くのオズ論に共通するのは、ドロシーの「家」を求める旅に注目し、ドロシーという少女の形象の中に、アメリカ人の国民的な探究を読みとろうとする傾向である。例えば、『オズ』を政治的な比喩ととらえたヘンリー・リトルフィールド (Henry Littlefield) は、「[ドロシー]は、ボームの普遍的人物である。私たちの一人であり、分別のある人間で、しかも本当に問題を抱えている。」<sup>4)</sup>と言う。また、ブライアン・アタベリー (Brian Atterbery) も、ドロシーはリップ・ヴァン・ウィンクルの流れをくむ、「見知らぬ国の探究者、またはよそ者」というアメリカ型のヒーローを体現するという。<sup>5)</sup>さらに、ジェリー・グリズウォルド (Jerry Griswold) も、「オズの国は、荒唐無稽な空想上のアメリカという『外なる王国』である。しかしそれと同時に、……ドロシーのエディプス的な問題や家族問題が探られているので、『内なる王国』である」<sup>6)</sup>と述べている。つまり、家を求める孤児ドロシーの形象こそ、英国という「親」を失ったのち国家アイデンティティを模索する、共和国アメリカの状況を表わしているというのである。

## 2 『オズ』における探究の旅

### ◆ 「旅」をジェンダー化する

忘れてならないのは、『オズ』が東部出身の白人の男性作家によって書かれたことであり、「男性」の登場人物であるかかし、木こり、ライオン、オズの魔法使いも、問題を抱えていることである。しかも、この本のタイトルが『エメラルドの街』にはじまり、二転三転して『すばらしいオズの魔法使い』に落ち着いたことを考えると、<sup>7)</sup>オズの魔法使いを始めとする「男性」に焦点を当てるべきだと思われる。従って、本稿では、「家」を求める少女ドロシーを近代的家父長の共和国のヒーローとするよりも、各登場人物の抱える問題を性別役割という観点から捉え直し、彼らの旅が『オズ』出版当時のアメリカの社会・文化的状況をいかに反映しているかを明らかにする。

さて、登場人物の問題をジェンダー化すると、『オズ』には明かに二種類の「旅」がある。

一つは、ドロシーの「家」を求める旅であり、カンザスの農場を出発点とし、オズでの冒険をへてカンザスの家を終着点とする。ドロシーは、世紀転換期のアメリカ社会で今なお支配的なイデオロギー、「分離の領域」（「男は外、女は内」という言葉で集約的に表現される、性に基づく役割の領域分け）の規範に従って、「家」を求めて旅する。もう一つの旅は、かかし、木こり、ライオンら「男性」の旅であり、男たちが最終的には社会の指導者となるために必要な資質を求める旅である。彼らの旅の基点は、それぞれドロシーとの出会いにあり、旅の終着点は、各自が各地で支配者におさまる時である。この二種類の旅は、しばしば混同して論じられてきたが、厳密には別個の軌道を描いている。ドロシーの旅立ちは、かかしたちの旅のような自発性をもたず、竜巻による偶発的なものである。

1936年の映画版『オズ』は、この点を改変して、ドロシーが「虹の彼方」にある夢の国を求めてカンザスを逃げ出したと暗示する。ドロシーは、ミス・ガルチ (Miss Gulchi) が犬のトト (Toto) を駆逐しようとしていると養父母に訴えるのだが、「おまえは、いつも何でもないことで波風をたてている。(中略) 居場所をみつけて面倒を起こさないようにしておくれ!」と言ってとりあってもらえない。そこでドロシーは、「面倒の起きないどこか別のところ。トト、そんな場所があると思う? きっとあるに違いないわ」と空を仰ぎ、あの有名になった「虹の彼方に」という歌を歌うのである。

どこか、虹のかなたの空高く、  
むかし、子守歌で聞いた国がある。  
どこか、虹のかなたの空は青い。  
夢をあきらめないで、ほんとうに叶えられるから。  
いつか星をお願いをすると、  
はるか雲の上で目がさめる。  
悩みがレモンドロップのように溶けるところ、  
煙突のてっぺんよりずっと高いところ、  
そこに私はいくでしょう。

どこか、虹のかなたに、青い鳥が飛ぶ、  
鳥は虹のかなたに飛んでゆく。  
それなのに、どうして、どうして私は飛べないの。

サルマン・ラシュディ (Salman Rushdie) は、映画のこの場面を解釈して、「彼女がここで言わんとすること、彼女が純真さという元型で表しているのは、人間の<逃避>願望であり、少なくともそれと拮抗する定着願望と同じくらいに力強い願望である」<sup>8)</sup>と述べている。E.Y.ハーバーク (E.Y. Harburg) の作詞とハロルド・アーラン (Harold Arlen) の作曲によるこの歌は、ドロシーがカンザスを去る「理由」づけを情緒面で強化した。そして、ドロシー

の逃避願望に応えるかのように、彼女の姓名ゲイル (Gale) と親和性をもつ竜巻が彼女の脱出を助ける。

さらに映画では、この脱出効果を高めるための最新技術が使われた。灰色のカンザスを後にしたドロシーは、ラシュディの言うように、竜巻に運ばれながらドアや窓を通化儀礼的にくぐり抜けた後、テクニカラーの生み出す極彩色のオズに到着する。この場面での映画の歌と画像は、観客の感覚に強烈な印象を与える。ラシュディは、少年時代にインドのボンベイで観たこの映画が心を捉え、長じて作家となった後も、無意識の内に自作にその映像を投影したと言う。<sup>9)</sup>だが、ドロシーの旅が脱出願望により始まったという、この映画の解釈を刷り込まれたのは、ラシュディだけではない。【オズ】論では、多くの批評家がしばしばMGM映画を取り上げ、しかもドロシーが「理由」あって（つまり、灰色で不毛のカンザスを脱出したいがため）旅立ったと考える。だが原作には、ドロシーの出奔する必然性が書き込まれていないのだ。

#### ◆ ドロシーの旅の意義

原作では、カンザス大平原の自然環境や開拓農民の生活環境に、ドロシーが特に困難を感じているという描写はない。彼女は、ひたすら無邪気で、よく笑う快活な少女として描かれる。しかも、ペットのトトが彼女の快活さをより強調する。ドロシーは、「灰色」の表情をし「干からびて」しまった開拓農民の養父母にとって、幸せの体現者、無垢なるもの、希望の存在として対比的に描かれている。ドロシーを女性ヒーローとして注目する研究者たちは、彼女こそ「アダム的な無垢」の体現者であり、オズの国では救済者として立ちあらわれる、と解釈する。<sup>10)</sup>

しかも、ドロシーの分別、プラス思考ぶりは際立っており、それは家ごと竜巻に飛ばされる場面でのドロシーの描写に顕著に表れている。

ドロシーは、床の上に静かに座り、何が起こるか見てみようと思った。……けれども、何時間たっても、何もおそろしいことが起こらなかったの、ドロシーは心配するのをやめた。それから、静かに待って、これから何が起こるのか、見てみようとして心に決めた。……家がぐらぐら揺れ、風が吹きわめいていたけれども、ドロシーは、まもなく目を閉じて、ぐっすりと眠りこんでしまった。<sup>(13)</sup>

アタベリーによれば、「[ドロシー]は成長しない。……ドロシーは、成熟するよりも、むしろはちきれんばかりの少女らしさの型にはまりはじめた」<sup>11)</sup>のである。通常の英雄物語でヒーローが探究の旅に出るのは、ジョーゼフ・キャンベル (Joseph Campbell) によれば、かかし、木こり、ライオンたちのように現状の欠損に気づき、それを回復するためである。<sup>12)</sup>ではボームは、「ゆりかごの赤ん坊」<sup>(13)</sup>のごとき無邪気さと、大人顔まけの分別を合わせもつ申し分のない少女を、なぜ探究の旅に送り出したのか。これに対する大方の答えは、次のようなもので

ある。ドロシーは、オズに到着早々に東の魔女から奪った、銀の靴の潜在的な魔力に気づくために、はるばる旅をしたのだ、と。ドロシーの旅の終わりに、南の魔女のグリンダ (Glinda) が言う、「あなたは、[銀の靴] の魔力を知っていたら、この国にきた最初の日に、エムおぼさんのところに帰れたでしょうに」(168) と。これを受けてグリスウォルドは、少女が結末部で「自分本来の価値に気づき、自らの力に目覚める」<sup>13)</sup> ためにオズの国を旅した、と主張する。

しかし、魔女から奪ったものが、「彼女本来の価値」と言えるのだろうか (男性には、「知恵」「心」「勇気」という資質が与えられているというのに)。その上、銀の靴は、ドロシーが旅の出発点であるカンザスの家から持参したもの (本来のもの) ではないし、彼女の帰宅時に銀の靴はなくなっていた。「ドロシーは、立ち上がったとき、足に靴下しかはいていないことに気づいた。ドロシーが空を飛んでいる間に、銀の靴が砂漠に落ちて、永遠に失われてしまったからだ」(171) と、ボームは帰宅時のドロシーを描く。

以上を考え合わせると、ボームがドロシーに与えた任務は、むしろ、かかし、木こり、ライオン、オズの魔法使いとの出会いにある。ドロシーは、それぞれ問題を抱えた「男性」たちと出会い、彼らの問題解決の一翼を担わせられるために、はるばるオズの国へと旅をさせられた。従ってこの物語は、本当は男たちの物語であり、彼らこそ主人公なのだ。

### 3 悩める男性たち

#### ◆ かかしの自信喪失

かかしは、ドロシーが黄色い煉瓦の道を歩きはじめて出会う、最初の旅の仲間である。トウモロコシ畑で彼は、身体を自由を奪われていた棒からドロシーに解放されて、開口一番、「ご覧のとおり、ぼくには藁が詰まっているので、脳味噌がこれっぽっちもないのです」(71) と嘆く。だが、ドロシーはかかしを「思慮深い」とは思っても、問題があるとは考えておらず、かかしの嘆願に次のように冷静な対応をする。

「もしぼくがエメラルドの街にあなたといっしょに行けば、偉大なオズがぼくに脳味噌をくださるでしょうか」とかかしはたずねた。

「わからないわ」とドロシーは答える。「でも、そうしたいのなら、私といっしょに行ってもかまわい。もしオズが脳味噌をくださらないとしても、今のあなたより悪くはならないでしょう。」(8)

実は、脳味噌の問題は、かかしの自信喪失に由来する。彼は、トウモロコシ畑でカラスたちにかかしであることを見破られ馬鹿にされたあげく、畑を荒されるという精神的<sup>ト</sup>外傷<sup>ウ</sup>を負った。愚かであるがゆえ、一人前に勤めを果たせなかったという、かかしの「男」としての自信喪失。そこに、アメリカの農夫たちの状況が読みとれる。

端的に言えば、19世紀後半から世紀転換期にかけてのアメリカで、開拓農民をめぐる状況は大きく変化した。それまで大平原地帯への開拓農民の移住は緩やかな速度で進んできたが、19世紀後半になると、大陸横断鉄道の伸張と相まって開拓地への移住が激増した。ことに1880年代の土地ブームで、開拓者たちが土地を求めて殺到し、なかでもカンザス州では、過度の土地開発が進んだ。だが、1887年の早魃は、カンザス西部の農作物に深刻な打撃を与えた。しかも翌年には、土地ブームの後にきたデフレが、運悪く農家の経済的苦境に追い打ちをかけた。

サムエル・モリソン (Samuel Morison) は、世紀転換期のアメリカ経済について、次のように述べている。

工業生産高は、農産物の生産高を大きく上回っていた。……製品と原料の生産過剰や、行きすぎた鉄道建設への投資、熱に浮かされたような株の投棄などによって、1873年と1893年に、金融大恐慌が起こった……。この恐慌のあとに続いた不況の中で、労働者たちはかつてない激しさのストライキで彼らの不満を表明するし、農民たちは、政治によってその苦しい生活を一挙に解決しようと企てた。<sup>13)</sup>

ボームには、開拓農民の具体的な状況を熟知できる事情があった。彼は、州に昇格する直前のサウス・ダコタ準州の辺境の町アバディーンに移り住み、1890年から一年余り、週刊誌「アバディーン・サタディ・パイオニア」(Aberdeen Saturday Pioneer)の編集長として記事を書いた。特に、「我らが大家夫人」("Our Land Lady")と題するコラムでは、架空の女家主のビルキンス夫人 (Mrs. Bilkins) とその下宿人たちとの時事的な対話という形で、ボームは、早魃、先住民スー族、鉄道、女権運動などについて書いていた。

#### ◆ ブリキ仮面の男の悩み

ドロシーの次なる旅の仲間、森のなかで錆び付いて動けなくなっていたブリキの木こりである。苦難に陥った男に、ドロシーは次のように話しかける。

「あなた、うなった？」とドロシーはきいた。

「ええ、そうです。1年以上もうなっているのに、誰も聞きつけて、助けにきてくれなかったのです」とブリキの男は言った。<sup>(38)</sup>

ブリキの木こりは、「錆びつく」という恐怖体験を、1年以上もの間味わったのである。このブリキ男は、もとは人間だったが、東の魔女に呪いをかけられたために、斧をふるう手をすべらせて、次々と自分の手や足など身体の一部を失っていった。そしてその都度、彼の身体は、ブリキ職人の作るブリキの身体で補われ、ついには、完全なるメタリックの身体(機械)となっ

てしまった。木こりは、涙を流すと体の関節が錆びついて動けなくなる恐れから、片時も油さしを手放せない。ところが彼は、奇妙なことに、生身の身体の喪失を悔やむどころか、メタリックな身体を誇らしく思っている。木こりは言う、「ぼくの身体が日の光にきらきらと輝いたので、誇らしい気持ちになり、斧が手からすべってもかまわなと思うようになりました。どうせぼくのは、斧では切れない身体ですから」(43)。そして、彼は皮肉にも、涙を流すだけの感情があるにもかかわらず、人を愛する心を失ったという喪失感に強迫的にとらわれている。

実は、この木こりの個人史にも、アメリカの開拓史の一部が織りこまれている。森の奥で斧をふるうブリキの木こりは、森林地帯での開拓者を連想させる。マーク・ガーゾン (Mark Gerzon) の指摘するように、開拓時代に様々な男たちがフロンティアへ向かったにもかかわらず、独立独歩で、勇猛果敢に大地を征服する「<sup>フロンティアマン</sup>辺境開拓者」という「一つの男性のタイプだけが国民的英雄となった。一つのタイプだけが文化的元型となって、男の心に消えることなく残った。」<sup>14)</sup>だが、世紀転換期の白人社会では、産業化、都市化の波に洗われて労働環境が急変したために、昔ながらの「辺境開拓者」の男性性では立ち行かなくなった。木こりが東の魔女の呪文によって、次々と生身の身体を失う話は、独立独歩の「辺境開拓者」の男性性がしだいに東部の産業資本に馴化され、賃金をかせぐために機械的労働に従事する「一家の稼ぎ手」の男性性へと変容する様を連想させる。職場が家庭から分離する産業化のこの時期に、男たちは「戦場」と化した競争社会で、感情を切り離して働く男性性を形成していく。彼らは、人間らしい感情を「ブリキの仮面」の下に隠して、働く「機械」と化すことで、「外」なる男の世界で生き残る術を見出した。

#### ◆ 期待の重圧に苦しむライオン

ドロシーの三人目の旅の仲間、おくびょうなライオンは、森の動物たちの期待に応えるに足る勇気が自分にはない、と悩んでいる。

「どうしてあなたは臆病なの」と、ドロシーはたずねた。……  
「それがよく分からないのです」と、ライオンは答える。「たぶん、生まれつきそうなのでしょう。森のほかの動物は、当然のように、ぼくが勇敢なはずだと期待しています。ライオンは、どこでも百獣の王と考えられていますからね。」(48)

彼の悩みも、低い自己評価から生じている。だが、皮肉なことにこの告白をした次の章で、ライオンは次々と遭遇する困難に勇敢にも立ち向かい、自らの勇敢さを立証する。

このライオンは、白人の男性性のどのような状況を表わしているのだろうか。アンソニー・ロタンド (Anthony Rotundo) は、1870年から1910年の間に、産業化により無産の給与所得

者（事実上はホワイト・カラーの勤労者）の数が八倍も増加し、都市部ではこれらの勤労者を管理する官僚的秩序が形成され、それが彼らの精神面に、特に男性性に多大の影響を及ぼしたという。ロタンドによれば、「19世紀の中流階層の男性は、真の男とは、筋の通らない権威や単なる地位に決して頭をさげない独立独歩の人物であると信じていた。ところが、市場に現われた新しい構造の職場や職種は、そのような男性性の観念を受けつけなかった。」<sup>15)</sup>しかも、19世紀末に、男社会の実業界に女性が進出しはじめたことも、白人中流階層の男性が脅威を感じる原因となった。「男性は権力と優位性を保持してはいたが、男らしさの特権という感覚を保持し難くなった。……男から見た主観的な現実には、自分たちの職場がかつてと同じ意味での、男らしさを失ったということだった。」<sup>16)</sup>

こうした職場環境の変化に加えて、19世紀後半には、男性性の女性化が文化的な問題となったことも見逃せない。この現象は、近代化の中で「分離の領域」の習俗がより徹底したために生じたと考えられる。つまり、少年は、家庭という「女の領域」で母親により育てられるために、女性的な価値を刷り込まれて成長した。ロタンドによれば、「19世紀の男たちは、頑健な男性的タイプと穏和な女性的タイプに、自分たちを分けはじめた。……柔弱で内省的な男とタフで自信家の男は、社会的なタイプであるばかりか、文化的なシンボルともなった。」<sup>17)</sup>つまり、男性的な男性性と女性的な男性性は、相矛盾する文化的タイプとして、男性一個人の内面においても葛藤しながら共存したのである。

ボームがこのような内的葛藤をかかえて成長したことは、東部の教養ある白人家庭に育った少年時代の経歴からうかがい知れる。彼は、病弱のため家庭教師による教育を受け、読書と空想に耽りながら、孤独を楽しむタイプの少年だった。そして、ボームは12歳のとき、軍隊的規律、競争を教育理念に掲げる全寮制の男子校ピークスビル学院に入学するが、「真の男らしい性格」作りをめざす学院の教育を嫌い、2年後には退学している。<sup>18)</sup>

#### ◆ ペテンの暴露を恐れるオズ

ドロシーは、エメラルドの街に近づくにつれて、オズに関する二つの情報を入手する。第一は、「オズは、力のある、恐るべき人物」であり、彼が万人の願いを叶える能力の持ち主であること。第二は、オズの外見が見る人ごとに異なり、実像が謎に包まれていること。ボームは、この謎の人物への読者の関心、期待感を巧妙にかき立てる。オズの住民はドロシーに、「オズに会わねばならない」と異句同音に言う。またオズは、宮殿を訪れたドロシーをいかにも焦らすようなやり方で謁見する。ところがドロシーは、この人物が偉大でも恐ろしくもなく、ただの「平凡な男」で「ペテン師」であることを暴く。その上、この男がペテン行為の発覚を恐れて、ひたすら城中に閉じ籠り、孤独な生活を余儀なくされていることも明らかとなる。オズは



言う、

私は、こんなペテン師の生活に疲れた。この城から出ていけば、私が魔法使いではないことは、たちまち人々に知れわたってしまう。そして、彼らは、今までよくもだましてくれたとあって、私を悩ませるだろう。だから、私は、一日中、部屋に閉じ籠っていないてはならない。(137)

実は、ドロシーの暴露行為こそ、ペテン師オズに救済をもたらす。というのも、この事件の後、オズがペテン師の生活に終止符をうち、気球に乗って故郷のオマハに帰るからである。この意味で、オズのペテン性は、エメラルドの街と深く関わっている。彼が実像以上の人物を装い、自分にはない無限の力を誇示するのは、街の「緑の楽園」の幻想を維持するためである。また、緑の眼鏡を装着させることも、その戦略の一部である。ただし、彼が全くのペテン師というわけではなく、街の門扉には、確かに本物のエメラルドが埋め込まれているし、街の住民は実際に「だれもが幸せで、満足しており、富栄えているように見えた」(8)。従って、彼の自画像は、次のように矛盾したものとなってしまった。「私は偉大で恐るべきオズです」(124)。「私はペテン師です」(126)。「私は、よい人間ですが、よい魔法使いではありません」(129)。では、エメラルドの街のどこに、このような自画像を生み出す要因があるのだろうか。

エメラルドの街は、批評家の多くが指摘するように、1893年に世界博覧会の開催された「白亜の街」シカゴを連想させる。おりしもボームは、1891年にシカゴに移住し、『イヴニング・ポスト』誌 (*Evening Post*) の記者となった。当時のシカゴは、人口でニューヨークにつぐ全米第二の都市であり、中西部の経済・産業発展の象徴であった。エミリー・ローゼンバーグ (Emily Rosenberg) は、アメリカン・ドリーム促進の初期に開催されたシカゴの世界博覧会が、合衆国の領土拡張政策の象徴的な祭典だったと主張する。<sup>19)</sup>ゼネラル・エレクトリック社が会場に建てた電光を放つ巨大なエジソン・タワーに象徴されるように、博覧会の展示物は「技術の魔法」<sup>20)</sup>を誇示し、各国のブースは、ポリネシア風のダンス、ラップランド人の村、中国演劇などのように<sup>21)</sup>、帝国主義的な国際性とアメリカ主導型の進歩主義信仰を濃厚に見せていた。

この祭典が目くらしに過ぎないのは、同年に大金融恐慌が起こり、国内の農民や労働者が苦境にあえいでいたこと、この三年前の1890年には、ウーディッド・ニーで先住アメリカ人の大量虐殺があったこと、5年後の1898年にアメリカがハワイを併合し、また、米西戦争でスペインを破り、プエルトリコ、グアム、フィリピンを属領にしていたことから明らかである。なかでもフィリピンに関しては、合衆国の一部ではなく、関税法を適用する保護領として位置づけ統治した。つまり、一方では、領土拡張の野望を満足させながら、フィリピン島からの砂糖やタバコなどの生産物は輸入品扱いして関税をかけたのである。モリソンは、「植民地主義」

や〈帝国主義〉の実験において、アメリカのフィリピンにおける統治ほど輝かしい成果を収めた例は他にあまりなかった」と述べている。<sup>22)</sup> こうして、合衆国の内外では、キリスト教の宣教による文明化、個人の自由の喧伝という「福音」の陰で、合衆国による民族的・人種的「他者」の植民化という「ペテン」が進行していたのである。

ボームは、大半のヴィクトリア朝アメリカ人と同じく、合衆国の近代化を受け入れていた。だが、その近代化が生み出した産業化、都市化の弊害は、近代化の中心的担い手である白人男性の生き方を大きく変えることとなった。また、国の内外で、「他者の植民化」という近代化の影が一段と濃厚になりつつあった。おりしもそれを象徴するかのよな事件が起きた。それは、1890年に辺境の町アバディーン近く、ウーンディッド・ニーにおいて、白人の辺境開拓民を「防護」という大義名分で、白人が先住アメリカ人のスー族を大量殺戮した事件である。ジャーナリストのボームは、「我らが大家夫人」のコラムで、スー族の指導者で白人と交流のあったシットング・ブル (Sittng Bull) の死を悼みながらも、「フロンティア開拓者たちの安全は、なによりもこのインディアンの残党を全て抹殺することで確かなものとなる。……私たちの安全は、ただ一つ、インディアンの皆殺しにかかっている。」<sup>23)</sup>と述べている。ボームは、この事件が白人の生存のためには避け難い事件であり、指導者シットング・ブルに反逆して白人に殺された一部のスー族には、憐憫を感じないと書き記している。ナンシー・T・クパール (Nancy T. Koupal) は、ボームのこの記事が、当時の住民の懸念を反映したものだとして述べている。<sup>24)</sup> だが、ボームの思考は明らかに、白人対「他者」(先住民)という近代的二項対立の概念に拘束されていた。ボームは、近代化の影がもたらす不安を感じとっていたに違いないが、近代的思考の枠を超えられなかったのだ。そうして、近代化の影に捉えられたボームは、矛盾と不安に満ちたオズという男性像を描いてしまった。

以上のことから言えることは、ボームが近代的こども観の信奉者として、無垢なる救済者ドロシーをオズに送り込まねばならない状況が当時のアメリカにあったということだ。家父長国アメリカは、その国家アイデンティティの男性性に生じた不安や喪失感に光を当て、本来のあるべき姿や「居場所」に戻るために、分別がありながら楽天的で無垢な子どもという希望のアイコンを、ぜひとも必要としたのである。その甲斐あって、かかし、木こり、ライオンは、適所を得て支配者となり、オズは本来の居場所オマハに帰った。そういう意味で、オズの国は、現実の混迷する共和国アメリカを映し出す鏡であり、もう一つのアメリカであると言えよう。ボームは、ルイス・キャロル (Lewis Carroll) が鏡の国にアリスを送り込んだように、このアメリカ版「不思議の国」の物語で少女を「鏡の国」オズに送り込んだが、アメリカのおとぎ話にふさわしいアメリカ的な使命を少女の肩に負わせることも忘れなかった。アメリカン・ドリームの影で不安に揺れる男たちに自信を回復させるという使命を。

注

- 1) 二刷以後, “wonderful” がタイトルから消えた。Cf. *The Annotated Wizard of Oz*, 28.  
なお, 本稿での引用は次のテキストによる。 *The Wizard of Oz*. 1900, London: Penguin, 1982.
- 2) *Fairy Tale as Myth, Myth as Fairy Tale*, 122.
- 3) *The Wonderful Wizard of Oz in American Popular Culture*, 6.
- 4) “The Wizard of Oz: Parable on Populism,” *American Quarterly* 16, 47-58.
- 5) *The Fantasy Tradition in American Literature*, 97.
- 6) 『家なき子の物語』 47-48。
- 7) *The Annotated Wizard of Oz*, 28-29.
- 8) “A Short Text About Magic,” *The Wizard of Oz*, 23.
- 9) *Ibid.*, 18.
- 10) 『家なき子の物語』 21, *The Wonderful Wizard of Oz in American Popular Culture*, 70-71.
- 11) *The Fantasy Tradition in American Literature*, 98.
- 12) ジョゼフ・キャンベルは, 次のように述べている。「ふつう英雄の冒険は, なにかを奪われた人物, あるいは自分の社会の構成員にとって可能な, または許されている通常の体験には, なにか大事なものが欠けていると感じている人物の存在から始まります。それから, この人物は, 失ったものを取り戻すため, あるいはなんらかの生命をもたらす霊薬を見つけるため, 日常生活を超えた一連の旅に出かけます。たいがいそれは, どこかへ行ってまた戻ってくるというサイクルを形成しています。」(『神話の力』 321)
- 13) 『家なき子の物語』 47-48。
- 14) サムエル・モリソン著『アメリカの歴史・4』西川正身訳(集英社, 1997), 148-49。
- 15) Mark Gerzon, *A Choice of Heroes* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1982), 10.
- 16) E. Anthony Rotundo, *American Manhood* (New York: Basic Books, 1993), 249-50.
- 17) *Ibid.*, 250.
- 18) *Ibid.*, 265.
- 19) *L. Frank Baum: Royal Historian of Oz*, 15-16.
- 20) Emily S. Rosenberg, *Spreading the American Dream* (New York: Hill & Wang, 1982), 3-13.
- 21) *Spreading the American Dream*, 5.
- 22) Anne Thwaite, *Waiting for the Party* (New York: Scribner, 1974), 149. [『家なき子の物語』 35ページに引用]

吉田純子

23) 『アメリカの歴史・4』254。

24) L. Frank Baum, ed. & annotated Nancy Tystad Koupal, *Our Land Lady* (Lincoln: Nebraska U P, 1996), 147.

25) *Ibid.* 147.

### 引用・参考文献

Atterbery, Brian. *The Fantasy Tradition in American Literature: From Irving to Le Guin*.  
Bloomington: Indiana U P, 1980.

Baum, L. Frank. *Our Land Lady*. ed. & annotated Nancy Tystand Koupal, Lincoln:  
Nebraska U P, 1996.

— — —. *The Wizard of Oz*. 1900, London: Penguin, 1982.

Campbel, Joseph. *The Power of Myth*. New York: Doubleday, 1988. [『神話の力』飛田茂雄  
訳 (早川書房), 1992]

Carpenter, Shirley Angelica & Jean Shirley. *L. Frank Baum: Royal Historian of Oz*.  
Mineapolis: Lerner Publications, 1991.

Earle, Neil. *The Wonderful Wizard of Oz in American Popular Culture: Uneasy in Eden*.  
Dyfed, Wales, UK.: The Edwin Mellen P, 1993. eds. Gardner, Martin & Russel B. Nye.

*The Wizard of Oz and Who He Was*. East Lansing, Michigan: Michigan State U P,  
1957, rept. 1994.

Gerzon, Mark. *A Choice of Heroes*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982.

Griswold, Jerry. *Audacious Kids: Coming of Age in America's Classic Children's Literature*.  
New York: Oxford U P, 1992. [『家なき子の物語』吉田純子他訳 (阿咩社, 1995)]

Hearn, Patrick Michael. *The Annotated Wizard of Oz*. New York: Clarkson N. Potter,  
1973.

Littlefield, Henry. "The Wizard of Oz: Parable on Populism," *American Quarterly* 16  
(Spring 1964), 47-58.

Morison, Samuel Eliot. *The Oxford History of the American People*. [『アメリカの歴史』西  
川正身翻訳監修 (集英社, 1997)]

Nathanson, Paul. *Over the Rainbow: The Wizard of Oz as a Secular Myth of America*. New  
York: State U of New York P, 1991.

Rosenberg, Emily S.. *Spreading the American Dream*. New York: Hill & Wang, 1982.

Rotundo, E. Anthony. *American Manhood*. New York: Basic Books, 1993.

Rushdie, Salman. *The Wizard of Oz*. London: BFI Publishing, 1992.

Zipes, Jack. *Fairy Tale as Myth, Myth as Fairy Tale*. Lexington: Kentucky U P, 1994. [『おとぎ話が神話となるとき』吉田純子・阿部美春訳（紀伊国屋書店, 1998）]

Men Uneasy in the Land of Oz: Masculinity in *The Wizard of Oz*

Yoshida Junko

L. Frank Baum's *The Wizard of Oz* has been widely read since its first publication in 1900 and variously interpreted by critics. However, most interpretations have focused on Dorothy's journey to find her way back home, not on the journey of the male characters, i.e., the Scarecrow, the Tin Woodman, and the Cowardly Lion. Unlike Dorothy's journey, which was accidentally started by the tornado, the males' journeys seem to have been started for reasons. These "males" think they have to meet the Wizard of Oz to ask him for a brain, a heart, and courage, respectively. The examination of the above motivations will lead us to consider that there are two types of journeys in the story.

The two different types often have been confusingly discussed as though there were only a single journey. However, from the viewpoint of gender, we should discuss them separately. First, Dorothy's journey is forced on her by the tornado, not initiated through her own will, and her quest is closely related to the notion of female sphere, home. In addition, even while Dorothy is in Kansas in the opening pages, she is portrayed as an innocent child full of mirth, in contrast to her adopted family who are portrayed as exhausted and dried up due to the climate and their hard lives as pioneers. Meanwhile, the male characters think they lack essential elements in their personalities, which makes them less than whole. Their compulsive desire to become whole can be explained by their lots in the story: they eventually become rulers in society. Therefore, Dorothy as an innocent, fearless, joyful and thoughtful girl is dispatched to the imaginary land to help the uneasy males seek and establish their gender identity.

As Neil Earle points out, the atmosphere in *The Wizard of Oz* reflects the prevailing unease in the proto-modern world of the 1890s of America. It was the period when rapid social and technological change was reaching epidemic proportions, and farmers and urban workers suffered from recurring economic depressions due to the unregulated system of capitalism.

Seen from the perspective of gender, the ailing male characters embody the uneasiness of masculinity in modern patriarchal America at the turn of the century. The ideal manhood of early pioneers in the woodlands and later on the prairies which had been embodied by

“American Adam” in the New World “Eden” was no longer wholesome because the rapid industrialization and urbanization caused a change in the conception of ideal masculinity. This masculinity crisis can be clearly seen in the complaints of the Scarecrow, the Tin Woodman, and the Cowardly Lion.

During the same period, America was pursuing an expansionist policy on the international front because the American frontier had closed at home. In other words, the expansion of American territory and its economy heavily depended on the exploitation of ethnic and cultural “others” both inside and outside the country. It was no coincidence that the Colombian Exposition was held in Chicago in 1893. As was shown in the various glittering exhibitions in the urban wonderland called the “White City,” this world fair was the landmark of the spreading American dream. Three years before the fair was the gruesome massacre of Native Americans of the Sioux tribe at Wounded Knee. Five years after the fair, America expanded its territory by defeating Spain in the Spanish-American War.

Obviously, the manhood of the Wizard of Oz is closely connected with his domination over the Emerald City. In the same way, the “manhood” of the American empire was on display in the sparkling exhibitions of the Columbian Exposition. Taking America’s exploitative and expansionist attitude toward “others” into consideration, the dazzling wonderland can be seen as “deceptive and illusionary” like the wizard’s magic after all.

As a journalist, Baum was naturally alert to both international and domestic affairs. Moreover, he had moved to Chicago just before the world fair. How he felt about American civilization can be easily imagined from the words of the Wizard of Oz when his identity is finally disclosed as a humbug. The Wizard apologetically said, “I am a good man, though I am a bad wizard.” Baum as a liberal Easterner still believed, or tried to believe, in the manifest destiny of America, but he must have been beginning to feel uneasy about America’s masculine identity.